



ウエスト フレッシュウインド

(西始良の爽やかな風)

始良市立西始良小学校

「五月雨の 晴れ間にいでて 眺むれば
青田すずしく 風わたるなり」 作者 良寛

校長 高瀬 薫

梅雨の合間を縫って田植えをしました。今年もおやじの会の皆さんが企画運営して下さり、子どもと大人を合わせて60人ほどが参加しました。昔ながらの手植えで、手植えをするには手頃の広さの田んぼに餅米の苗を植えていきました。子どもの中には、水につかった足下の泥に足を取られ転んでしまった子や何かの拍子に跳ね返った泥水で顔が汚れていた子もいました。しかし、子どもたちの表情は、田植えをした喜びと汗を流した清々しきで笑顔いっぱいでした。

上記の和歌の作者良寛は江戸時代後期の僧侶であり歌人でもあります。梅雨の真っ盛りに外を眺めれば、一面に田植えをした後の青々とした田んぼがひろがり、そこには涼しい風が吹き渡っています。まるで江戸時代と現在の風景が重なって見えるような気がします。子どもたちは今回の活動のように1年生から6年生まで異年齢の集団による体験活動の中で、自尊感情や自己有用感を育てていきます。これから稲刈り、餅つきと活動が展開されますの是非参加して下さい。

「いもこじ」の精神で子ども同士の交流を

昼休みに校庭に出てみると、子どもたちが所狭しと遊んでいます。サッカーやドッチボールなどの集団でのボール遊びに興じているグループ。一方、二・三人でバッタなどと虫遊びをしている小グループもあります。その子どもたちをよく見ていると、様々な争いが起きています。例えば、ドッチボールであれば、誰と仲間になるかで揉めています。虫遊びだと「僕が最初見つけた虫だ。だから、僕のものだ。」などです。しかし、そのような問題は子ども同士で折り合いを付けて解決しているようです。この解決する過程が非常に大切なような気がします。大人のいない世界で、自分たちで解決していく。この経験の積み重ねが自立した子どもたちを育てていくのだと思うのです。「いもこじ」とは、桶の中に芋と水を入れ、棒などでかき回すことを言います。桶の中で芋同士磨き合っどどの芋も傷付くことなく立派な芋になります。子ども達もこのことと同じように、子ども同士切磋琢磨して成長していきます。様々な体験を通し、時には「いもこじ」の精神で育てていきましょう。



ゲーム依存症

オンラインゲームなどの生活や健康に深刻な影響が出た状態を「ゲーム依存症」と呼ぶ。WHOが今示したゲーム依存症の診断基準は、

- 1 ゲームの時間や頻度などを自分でコントロールできない。
- 2 日常生活でゲームを最優先させる。
- 3 ゲームのために家庭や仕事、勉強などに大きな支障が生じても、さらにのめり込んでしまう。3項目からなります。これらが一年以上続くか、症状が重い場合を「ゲーム依存症」ということになります。

ゲームをさせる場合は、家庭でルール作りをすることが大切です。本来は、乳幼児期からメディア教育を進めることが重要なことです。そこで、次の点について家庭で取り組んでみてはどうでしょうか。

- 一 時間を決める。(一日 三十分)
- 二 場所を決める。(使用する場所は居間のみ)
- 三 保管場所を決める。(保管場所は親の目の届く場所。充電は保管場所)

※ ゲーム障害は心の病気ではなく脳の病気です。受診する場合は、まず小児科に行きましょう。

